

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 3 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2009～2012

課題番号：21243017

研究課題名（和文） ケンブリッジ、LSEの経済思想と福祉国家の基礎理論

研究課題名（英文） Economic Thought of Cambridge and LSE, and the Foundations of the Welfare State

研究代表者

西沢 保 (NISHIZAWA TAMOTSU)

一橋大学・経済研究所・教授

研究者番号：10164550

研究成果の概要（和文）：19世紀末以降のケンブリッジ、LSEの経済思想を、オクスフォードを視野に入れ、福祉国家理念の生成、展開、危機との関係で共同研究を進め成果を得た。具体的には、1. 創設期の厚生経済学と福祉国家—ケンブリッジ学派とオクスフォード・アプローチ、2. マーシャルとマーシャリアンの産業経済学・人間福祉の経済学、3. ケンブリッジ、LSEと戦後経済秩序・福祉国家の基礎理論、4. ケインズ経済学の受容と批判の経緯の理論的解明、の4点を中心に国際共同研究を進め成果を得た。

研究成果の概要（英文）：We pursued the joint research work on the economic thought of Cambridge and LSE, also considering the Oxford approach, in relation to the formation, development and crisis of the welfare state in Britain, and got some positive results. More specifically, we focused on 1. Welfare economics and the welfare state in the formative age—the Cambridge school and the Oxford approach, 2. Marshall and Marshallians on the industrial economics and the economics of human welfare, 3. Economic thought of LSE and the post-war economic order and the welfare state, 4. Theoretical elucidation of the acceptance and critic of the economics of Keynes.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	8,800,000	2,640,000	11,440,000
2010年度	8,300,000	2,490,000	10,790,000
2011年度	7,700,000	2,310,000	10,010,000
2012年度	8,100,000	2,430,000	10,530,000
計	32,900,000	9,870,000	42,770,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学・経済学説・経済思想

キーワード：経済政策、経済思想、福祉国家、LSE、ケンブリッジ、マーシャル、ニュー・リベラリズム、ネオ・リベラリズム

## 1. 研究開始当初の背景：

我々は、本研究に先行する基盤研究（B）「ケンブリッジ学派の多様性とその展開—思想・理論・政策の複合的研究」（2002-2004年（課題番号：14330002））及び、基盤研究（A）「ケンブリッジ学派に関する経済学史的視座からの批判的評価」（2005-2008年度（課題番号：17203015））において、マーシャ

ルとその時代、ケインズとその時代を中心に、ケンブリッジ学派の多様性とその展開を、思想、理論、政策という複合的な観点から研究し、ケンブリッジ学派とは何であったのかを歴史的、理論的に解明すべく共同研究を進めてきた。

19世紀資本主義と古典派経済学が行き詰まるなかで形成された1870年代から現在に

至る経済学・経済思想のいくつかの側面を、福祉国家理念の形成、展開、危機との関係において解明し、合わせて関連する資料を整備して、現代経済思想史研究の環境基盤整備を促進したいと考えた。

また、ケンブリッジ学派の研究を深め拡充したいということに加えて、ケンブリッジと対抗的な関係にあったLSE（ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス）の経済思想・経済学者を、思想・理論・政策の観点から究明し、戦後経済秩序形成の基礎理論とイギリス福祉国家の基礎理論を解明したいという計画もあり、自然にオクスフォードの経済思想・経済学者も視野に入れることになった。

更に19世紀末に創出された新自由主義（ニュー・リベラリズム）の理念、ケインズ、ベヴァリッジらによって展開された新自由主義的な福祉国家の理論（完全雇用と社会保障）を追求し、それを踏まえてハイエク的なネオ・リベラリズムを基礎とする現代イギリス福祉国家の理論との緊張関係を思想的・歴史的に解明し、第二次大戦後におけるケインズ革命の進行とマクロ経済学の展開、ケインズ経済学の受容と批判の経緯を批判的に追求し、経済学史研究と現代経済理論との空白を埋めることを目指したいという大きな課題を持つにいたった。

我々は、本研究に先行する基盤研究（A）、およびそれに先行する基盤研究（B）において、毎年、この領域で世界の研究をリードする海外の研究者を招聘して国際コンファレンスを開催し、成果の公表に努めると同時に我々自身の研究を向上させようとしてきた。こうした中で、国際的な研究者のネットワークの構築が進み、R. Backhouse (Birmingham)、C. Marcuzzo (La Sapienza, Roma)、M. Dardi (Firenze)、R. Arena (Nice)、B. Bateman (Denison) など、海外の有力な共同研究者との討議の中から共同研究の核となる研究課題を設定するようになった。

## 2. 研究の目的

(1) 創設期の厚生経済学と福祉国家—ケンブリッジ学派とオクスフォード・アプローチ：1930年代のロビンズ以前における厚生経済学あるいは福祉の経済学の多様性・多元性の解明は未開拓の状態にある。ピグーに代表される厚生経済学の創設期はイギリス福祉国家の形成期でもあり、多様な福祉の経済思想が存在した。マーシャルによる経済学の専門化、ピグーによる厚生経済学の科学化は、この時代の経済学を方向づけたが、ケンブリッジの外には、LSEを中心にイギリスの社会政策学派があり、オクスフォードではグリーン、ラスキンの理想主義の影響が強く、ラスキンの厚生経済研究はホブソンによってかなり体系化された。創設期の厚生経済

学・福祉の経済学の多様性・多元性の実態を明らかにし、科学化のなかで見失われた非厚生主義的な福祉の思想を再評価し、福祉国家の基礎理論としての厚生経済学の可能性を究明する。

(2) マーシャルとマーシャリアンの産業経済学・人間福祉の経済学：①マーシャルにとって、経済学研究の原点はwell-beingの追求であり、「富の増大よりも生活の質の改善」が問題であった。経済進歩と人間の進歩、人間と経済を結びつけるマーシャルのヴィジョンを、マーシャルの未刊の手稿群“Progress”から再構成し、マーシャル経済学の到達点に光を当てる。②チャプマン、レイトン、マックレガー、フローレンスのようなマーシャル派、第二次大戦後オクスフォードで活躍したアンドリュースやリチャードソンのようなネオ・マーシャリアンについて、まとまった研究はほとんどない。人と組織、知識、生産技法、企業・産業組織によるその標準化とイノベーションがマーシャル産業組織論の中核であった。マーシャルとマーシャル派の産業組織論・集積論の理論的伝統を解明することは、現代の集積論研究にも一定の寄与をなす。

(3) ケンブリッジ、LSEと戦後経済秩序、福祉国家の基礎理論：ケインズ、ベヴァリッジ的な新自由主義とハイエク的なネオ・リベラリズムの知的交錯・緊張関係を追求し、戦後経済秩序形成の基礎理論と現代イギリス福祉国家の知的起源を歴史的に究明する。1938年リップマン会議に端を発するハイエクらによるコレクティブイズムへの反革命、free market economyの思想・市場観の興隆、IEAのようなシンクタンクの活動をフォローし、サッチャー反革命にいたる経済政策思想を検証する。

(4) ケインズ経済学の受容と批判の経緯の理論的解明：戦後におけるケインズ革命とマクロ経済学の展開、ケインズ経済学の受容と批判の経緯を、経済学史および経済学方法論の見地から批判的に追求し、経済学史と現代経済理論の空白を埋めることを目指す。マネタリズム、新しい古典派、ニュー・ケインジアンと展開する現代経済理論のなかでケインズの原理論をいかに再評価すべきかを追求する。

## 3. 研究の方法

本研究組織の多くの者は、本研究に先行する基盤研究（B）および基盤研究（A）をもとに、共同研究を積み重ね、毎年、世界の研究をリードする内外の研究者を招聘して国際コンファレンスを開催し、研究の向上に努めてきた。また海外での資料調査・収集、研究交流、そして国際コンファレンスでの報告も重ねてきた。こうして築かれてきた研究上の

ネットワークと資源を最大限に活用し、研究分担者、連携協力者、研究協力者、海外研究協力者との有機的な連携・協働のもとに、研究対象をケンブリッジからLSEおよびオクスフォードに広げ、時期も第二次大戦以降に拡充して、イギリスを中心とする現代経済思想史研究を、その基盤整備とともに推進し定着させた。国際コンファレンスを定着させ、国際共同研究による研究成果を公表した。

#### 4. 研究成果

(1) 創設期の厚生経済学と福祉国家—ケンブリッジ学派とオクスフォード・アプローチ：ロビンズによるピグー批判以前の時期を中心に、シジウィック以降における創設期の厚生経済研究・福祉の経済学について、ケンブリッジだけでなく、オクスフォードやLSE、更にハミルトンが言う「厚生経済学のイギリス学派」をも含めて、その多元性・多様性の実態を解明し新たな知見を得た。西沢は Roger Backhouse (Birmingham) との共編で、その成果を *No Wealth But Life. Welfare Economics and the Welfare State in Britain, 1880-1945*, Cambridge University Press, 2010 にまとめた。これは第一部がケンブリッジ学派の厚生経済学と福祉国家、第二部がオクスフォード・アプローチとなっており、ラスキンの思想を展開したホブソンの厚生経済学などをもって、厚生経済学の歴史に新たな論点を提示し国際的にも高い評価を得た。また、この日本語版とも言える『創設期の厚生経済学と福祉国家』(ミネルヴァ書房)が、西沢・小峯編で間もなく刊行される。

(2) マーシャルとマーシャリアンの産業経済学・人間福祉の経済学：我々はこれまでの共同研究の一環として、マーシャルとシュンペーターについて、歴史学派を介在させ、進化・発展の観点から両者の社会科学的思考の現代的意義を探ることに努め、世界を代表する研究者の協力を得て、マーシャル、シュンペーター研究に新たな展望を提示した。また、西沢は藤井らの協力を得て、T. Raffaelli (Pisa), Marco Dardi (Firenze), R. Arena (Nice) らと協働して、「マーシャルとマーシャル派の産業経済学」に関する国際コンファレンスを行った。マーシャルと同時代のマーシャル派、戦後のネオ・マーシャリアン、産業集積について、Fred Lee, R. Langlois, M. Bellandi 等の協力が得られ、これも T. Raffaelli, T. Nishizawa, and S. Cook eds., *Marshall, Marshallians, and Industrial Economics*, Routledge, 2011 として出版され、この領域の研究の一つの集大成となり国際的に高い評価を得た。K. Caldari と西沢が進めている、マーシャルの未刊の最終巻“Progress”も手稿の翻刻、再構成がほぼ終了し、校訂注を作成している。

(3) ケンブリッジ、LSE と戦後経済秩序、福祉国家の基礎理論：戦後イギリス福祉国家の両輪とも言える完全雇用と社会保障について、小峯は『雇用政策』白書、『ベヴァリッジ報告』を中心に研究を進め、とくにベヴァリッジについてはいくつかの成果を公表した。また我々は、R. Backhouse, B. Bateman の協力を得て、“Liberalism and the Welfare State: from new liberalism to neo-liberalism” に関する国際コンファレンスを行い、その成果を、ニュー・リベラリズムと福祉国家の形成、ネオ・リベラリズムと福祉国家の転生・危機を内容とする本にまとめようとしている。これもニュー・リベラリズムとネオ・リベラリズムという現代的な課題に国際的な研究者が取り組んだもので、新たな知見を提供し、大きな反響が期待される。

(4) ケインズ経済学の受容と批判の経緯の理論的解明：これについては、平井が C. Marcuzzo と協力して国際ケインズ・コンファレンスを重ね、「新しい古典派」と「ニュー・ケインジアン」の比較検討、マクロ経済学の方法論的見地からの批判的検討、「不均衡理論とマネタリズムの意義と限界」、「ポスト・ケインズ派の批判的検討」、さらに「国際金融危機とケインズ」が加わり、その成果は B. Bateman, T. Hirai, and C. Marcuzzo eds., *The Return to Keynes*, Harvard University Press, 2010 として刊行され、中国語に翻訳されるなど大きな反響があった。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 23 件)

① Toshiaki Hirai, “International Design and the British Empire—Keynes on the Relief Problem”, *History of Economic Review*, 56, 2013, pp. -, 近刊(掲載確定)、査読有。

② 西沢保, 「創設期の厚生経済学と福祉国家—マーシャルにおける経済進歩と福祉—」, 『経済研究』一橋大学研究所, 64 巻 1 号, 2013, pp. 76-93, 査読有。

③ Toshiaki Hirai, “Exploring Hawtrey’s Social Philosophy through His Unpublished Book, Right Policy”, *Journal of the History of Economic Thought*, 34-1, 2012, pp. 169-192, 査読有。

DOI: 10.1017/S1053837212000144

④ Tamotsu Nishizawa, “Marshall on Progress and People’s Welfare”, *History of Economic Thought and Policy*, 1-1, 2012, pp. 21-38, 査読有。

DOI: 10.3280/SPE2012-001003

⑤ 小峯敦, 「経済と福祉の連環—ベヴァリッジの略伝から現代へ—」, 『経済学論集』龍谷大学経済学部, 51 巻 4 号, 2012, pp. 71-92,

査読有。

⑥下平裕之、「D. H. マクレガーの有機的成長批判」、『山形大学人文学部研究年報』、8号、2011、pp.199-213、査読有。

⑦本郷亮、「ピグー『通貨の交換価値』（1923年）—邦訳と解説」、『弘前大学経済研究』、33号、2010、pp.98-114、査読有。

⑧下平裕之、「C. R. フェイの協同組合論」、『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』、7号、2010、pp.75-78、査読有。

⑨渡辺良夫、「ポスト・ケイジアンによるケインズ貨幣理論の拡充と展開」、『明治大学社会科学研究所紀要』、48巻2号、2010、pp.117-143、査読有。

⑩小峯敦、「F. ラヴィントンにおける企業家の役割」、『経済学史研究』、51巻1号、2009、pp.59-74、査読有。

⑪小峯敦、「ベヴァリッジの貧困観と家族観」、『社会思想史研究』、33号、2009、pp.43-56、査読有。

〔学会発表〕（計35件）

①Toshiaki Hirai, “Keynes and the Transmutation Process of the Plan for Commodity Control Scheme”, International Workshop “Economic Thought of Cambridge and LSE, and the Foundations of the Welfare State”, 2013年3月20日、一橋大学。

②渡辺良夫、「ケインズ貨幣経済思想の復活」、第2回ケインズ学会、2012年11月24日、明治大学。

③Kenji Fujii, “Marshall’s Economics and Marshallian Research Program”, 3<sup>rd</sup> “European Society for the History of Economic Thought & Japanese Society for the History of Economic Thought” Meeting, 2012年9月15日、Univ. of Corsica, Corte, France.

④近藤真司、「マーシャルとボウレイの統計学方法論」、経済社会学会全国大会、2012年9月1日、北海道大学。

⑤小峯敦、「大学行政官としてのケインズ—1920年代初頭、ケンブリッジの女性学位問題—」、経済学史学会75回大会、2011年11月5日、京都大学。

⑥Toshiaki Hirai, “International Design and the British Empire”, European Society for the History of Economic Thought, May 21, 2011, Bogazici Univ., Istanbul, Turkey.

⑦ Tamotsu Nishizawa, “Marshall on Progress and Welfare”, International Workshop “Firms, Markets and Entrepreneurship: From Marshall to Schumpeter”, 2010年9月15日、Univ. of Roma Tre, Italy.

⑧Kenji Fujii, “Which is More Marshallian,

Pigou or Coase? —The Meaning to be a Marshallian”, International Workshop “Firms, Markets and Entrepreneurship: From Marshall to Schumpeter”, 2011年9月14日、Univ. of Roma Tre, Italy.

⑨Atsushi Komine, “Beveridge on a Welfare Society: State, Market and Community”, HEW 2010 Annual Conference (History of Economics Society), 2010年6月27日、Syracuse Univ., New York, USA.

〔図書〕（計28件）

①西沢保・小峯敦編、ミネルヴァ書房、『創設期の厚生経済学と福祉国家』、2013年（近刊）（発行確定）。

②T. Hirai, M. C. Marcuzzo, P. Mehrling eds., Oxford University Press, *Keynesian Reflections*, 2013, pp. xxvi+320.

③H. D. Kurz, T. Nishizawa, and K. Tribe eds., Edward Elgar, *The Dissemination of Economic Ideas*, 2011, pp. vii+367.

④小峯敦編・著、ミネルヴァ書房、『経済思想の中の貧困・福祉—近現代の日英における「経世済民」論—』、2011年、pp.357。

⑤Tiziano Raffaelli, Tamotsu Nishizawa, Simon Cook eds., Routledge, *Marshall, Marshallians and Industrial Economics*, 2011, pp. v+325.

⑥山崎聡、昭和堂、『ピグーの倫理思想と厚生経済学—福祉・正義・優生学—』2011年、pp.264。

⑦Harald Hagemann, Tamotsu Nishizawa and Yukihiro Ikeda eds., Palgrave Macmillan, *Austrian Economics in Transition. From Carl Menger to Friedrich Hayek*, 2010, pp. xii+339.

⑧B. Bateman, Toshiaki Hirai and M. C. Marcuzzo eds., Harvard University, *The Return to Keynes*, 2010, pp.314.

⑨R. Backhouse and Tamotsu Nishizawa eds., Cambridge University Press, *No Wealth but Life*, 2010, v+244.

⑩平井俊顕、日本経済評論社、『市場社会論のケンブリッジ的展開—共有性と多様性』、2009年、pp. viii+343.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

西沢 保 (NISHIZAWA TAMOTSU)  
一橋大学・経済研究所・教授  
研究者番号：10164550

### (2) 研究分担者

平井 俊顕 (HIRAI TOSHIAKI)  
上智大学・経済学部・名誉教授  
研究者番号：60119112  
(H24：研究協力者)

(3) 連携研究者

渡辺 良夫 (WATANABE YOSHIO)  
明治大学・商学部・教授  
研究者番号：50130844

小峯 敦 (KOMINE ATSUSHI)  
龍谷大学・経済学部・教授  
研究者番号：00262387

袴田 兆彦 (HAKAMATA YOSHIHIKO)  
中央大学・商学部・教授  
研究者番号：20147002

藤井 賢治 (FUJII KENJI)  
青山学院大学・国際マネジメント研究  
科・教授  
研究者番号：20189989

下平 裕之 (SHIMODAIRA HIROYUKI)  
山形大学・人文学部・教授  
研究者番号：30282932

近藤 真司 (KONDO MASASHI)  
大阪府立大学・経済学部・教授  
研究者番号：50264817

本郷 亮 (HONGO RYO)  
関西学院大学・経済学部・准教授  
研究者番号：80382589

山崎 聡 (YAMAZAKI SATOSHI)  
高知大学・教育研究部・准教授  
研究者番号：80323905